

はじめに

人生を100年と仮定したとすれば、その十分の一の10年という歳月は長いのか短いのか。10年という節目は、どんなに長く生きたとしても十回ほどしか迎えることができないので、きつと長い節目のひとつなのではないかと思えます。

私にとって2005年4月25日に遭遇したJR福知山線脱線事故から10年という節目は、とても大きな意味を持っていました。本当であれば、事故から10年目の2015年にこうした事故後の心の変遷を記録した書籍の出版が決まっておき、提出すべき原稿の準備まで整っていたのです。出版されて形として残っていたはずなのですが、諸般の事情によって実現することができませんでした。心というものは人の根幹を担うものなので、ある時期に記録として残しておかなければ時間と共に生活環境が変わり、それに伴って生きる術として心の持ちようを少しずつ変えていくのが人間です。事故から2年後の2007年に、29名の有志と共に出版した被害者とその家族の事故直後の体験を記録した「あの日を忘れない」2005年4月25日の記憶」という手記集を読み返してみても、あのようなりアルな文章は今になるととても書けないでしょう。言葉もまた、心と同様に生き物なのです。10年目に記録が残せなかったのは、私にとって痛恨の極みでした。

事故から10年目が過ぎ、あれからさらに3年半の時間が経過しましたが、当時は毎日のように頭の中にあつた事故のことを、今は忘れて過ごしている時間が多くなりました。それは、事故当時に勤務していた会社を辞めて、個人で始めた仕事が忙しくなってきたということもありますし、物理的に住む場所を変えて、それまでとはまったく違うコミュニティの中で生活をしているということも関係していると思いますが、私の中では、

「10年を区切りに事故から決別をして自分の人生を生きる」と心に決めていたことが最も大きな要因であるように思っています。

私の妻は、この事故がきっかけで一生涯らないといわれる障害を持つことになりました。電車に乗っていた私であればいざ知らず、電車に乗っていなかった彼女が治らない病気になるという現実を、私は被害者として、また夫としてどのようにとらえ、どのようにこの事故に対峙してJR西日本という加害企業と向き合うべきなのかその後の大きな課題となりました。加害企業を憎むのはある意味当然のことですが、その企業の中にも生きた人間が働き、そして彼らにも家族がいて社会の葛藤の中で生きている姿を垣間見ると、単純に憎しみや怒りだけでは語れない思いがあります。この13年半の間に、彼らは新幹線の台車の亀裂の異常を感じしながら電車を停めることができなかつたという重大インシデントなどを発生させましたが、それでも事故当時に比べ、と、並々ならぬ努力でこの巨大組織を生まれ変わらせようという意気込みは伝わってきます。

そうした中で、10年目にやり残したことが、人生の中で十回ほどしかない節目を通過するための課題として私の中で引つかかっており、いずれかのタイミングでこのことをクリアしなければ、きつと将来後悔するだろうという気持ちを引きずりながら3年半を過ごしてきました。幸い、私も妻も事故後のあゆみを詳細に記録してきた原稿が残っていましたので、それらを再度編纂してきちんと形にしたいと考えるようになりました。

事故から3年後の2008年7月に会社を辞めて独立して仕事を始めましたが、そこからも同様に10年の時間が経過しました。病気の妻を一人で家に置いておくわけにはいかなかったため、何の準備もせずに会社を辞めてやり始めた事業なので大変な時期がありました。いろいろな方の支えがあつて「Design Office COZY」というデザイン事務所は、2018年7月に10周年を迎えることができました。時間の経過や住む場所の変化

と共に少しずつ仕事の内容も変わってきましたので、包括的に事業内容を表現することができる「コトノデザイン」という名称に変更し、「ひとのコト」「まちのコト」「仕事のコト」をデザインする事業内容で新たなスタートを切ることにしました。これまでに、冊子のデザインや編集作業などにも数多く携わってきましたが、個人の手記であれ、団体や企業の活動報告、社会的な啓発事業などであれ、それぞれにクライアントの皆さまの思いが凝縮された媒体ですので、一緒にそれらを創り上げていくことに大きなやりがいと喜びを感じています。また、文章として文字を残すことは、いのちが消滅した後にも人が生きてきた証を留める作業に他なりません。私は今後、「コトノデザイン」の事業のひとつとして、そうしたことに取り組みたいと願っています。その最初の一冊目に、事故から10年目にやり残した記録の出版を、自ら立ち上げた「コトノ出版舎」で行うことにしました。

去る2018年4月24日、毎年事故の前日の記念日になりますが、結婚25周年の銀婚式を迎えました。妻とは大学時代から一緒に住んでいましたし、卒業後すぐに籍だけを入れて結婚しましたので、ずいぶん長い時間を一緒に過ごしてきました。大学では二人とも音楽を勉強しており、私は作曲を専攻していましたので、将来作曲家になりたいと思って結婚後も定職につかずにオーケストラや室内楽などの曲を書いていました。その後、27歳のときに、阪神・淡路大震災で被災した動物などを保護している民間の施設で働き始め、30歳のときには「動物のいのちと子どもの教育」をテーマにしたNPO法人を立ち上げました。そしてついにお金が無くなると、31歳で美術の展覧会の企画運営をする会社の編集デザイナーの仕事をするようになりましたが、35歳のときにJR福知山線の事故に遭い、38歳のときに会社を辞めて今のデザイン事務所を立ち上げました。

いろんな出来事を妻と共に経験し、乗り越えてきたので、私は妻のことを最も近くで一番理解している存在のつもりでしたが、彼女が患うことになった双極性障害という心の病気は、「鼓動」がふたつであることを思い知らされました。同じ事象に遭遇しても、長年ずっと一緒に暮らしてきた夫婦でさえもとらえ方や受ける心のダメージはまったく別なのです。それと同時に、夫婦というものが、こんなにも結びつきが強いものだと初めて知りました。そうした事故から13年半のあゆみを、「ふたつの鼓動」の視点で記録に残したのがこの書籍です。今は心穏やかに過ごせる時間も増えてきましたが、皆さまの予想に反して、事故後、我が家が最も大変だった時期は、事故から2年目から5年目ぐらいの間でした。事故直後は身体の痛みや直接的な恐怖による心のダメージなどで分かりやすい被害なのですが、その後の苦悩や葛藤はまったく予想することができない事象の連続でした。

世の中にはさまざまな事件事故に巻き込まれ、苦悩の中をもがきながら生きている人が数多くおられますし、今後、必ず起こるといわれている南海トラフ巨大地震などで困難に立ち向かわなければならぬ人たちがいることでしょう。私たちが事故後13年半の間に経験したことが、そうした皆さまに少しでも生きる勇気を与えることができたら嬉しく思います。

2018年9月20日

小椋聡

【目次】

はじめに	2	第五章	夫の鼓動Ⅱ 事故直後	45
目次	6	第六章	妻の鼓動Ⅲ 事故から半年～1年目	54
第一章	微熱	第七章	最期の乗車位置 夫の刻 妻の刻	79 61
	現在(妻の視点) 事故前～事故前日(妻の視点) 現在(夫の視点) 事故前～事故前日(夫の視点)			
8		第八章	呼吸(妻の変調) 事故から1年目～3年目	93
第二章	妻の鼓動Ⅰ 事故当日(2005年4月25日)			
18		第九章	呻吟(夫の決断) 事故から1年半～4年目	109
第三章	夫の鼓動Ⅰ 事故当日(2005年4月25日)			
23		第十章	動悸(事故調査報告書に関わる 検証作業)示談) 事故から4年半～6年目	118
第四章	妻の鼓動Ⅱ 事故直後			
34				
第十一章	妻のあゆみ 事故から4年目～10年目			
130				
第十二章	夫のあゆみ 事故から7年目～10年目			
140				
第十三章	ピエタ			
152				
おわりに	156			